

規範意識は経年により変容するのか —量的側面及び質的側面からの検討—

藤澤 文（子ども心理学科）

Changes in Social Norms among Adolescents: Focusing on the Time Effect

Aya Fujisawa

Department of Child Psychology, Kamakura Women's University

Abstract

It has been suggested that normative consciousness in young people has weakened in recent times. Changes in normative consciousness on the basis of the time course effect were investigated quantitatively and qualitatively at three time points (2003, 2009, and 2011 (social crisis)). The results indicated that normative consciousness as measured quantitatively has not weakened over time and has actually strengthened for certain norms. When assessed qualitatively, participants that considered judgments related to norms to be a matter of personal choice were found not to have increased over time. Most participants recognized norms as moral obligations, or conventions. The above results are discussed in relation to social and economic conditions.

Key words : normative consciousness, adolescent, time-course effect in normative consciousness, social crisis
キーワード: 規範意識、青年、規範意識の経年変化、社会的危機

問題と目的

現代社会において、青年の規範意識^(注1)の低下あるいは変容について言及されることがある（例えば、菅原，2005，友枝・鈴木，2003）。また、内閣府大臣官房政府広報室（2005）によると、「少年非行が増加しているか」という問いに対し、「増えている（「かなり増えている」66.1%，「ある程度増えている」27.0%）」と回答する国民の割合が93.1%であることも示される。その一方で、青年の規範意識が低下しているのは発達的な現象であるという立場（内藤，1987；山岸，2002）や

時間の経過に伴う青年の規範意識の低下がおおむねないことを示す実証的証拠もある（藤澤，2013；高橋，2003）。このように、青年の規範意識の変容についてはいくつかの立場が混在しており、また、規範意識に関する研究論文数の少なさ（二宮，1991）が指摘されていることから実証的に検討することには意義があると考えられる。

青年の規範意識の低下について、先行研究（実証・理論的研究を含む）を概観すると、大きく2つの考え方がある（藤澤，2009）。1つ目は、時間の経過に伴い社会における価値が変容した結果、

規範意識が低下したと捉える立場（Beck, 1986）であり、もうひとつは、認知発達に由来する発達過程の一部であると考える立場（内藤, 1987；山岸, 2002）である。これらは、規範意識が低下する理由として、前者が「経時効果」^{（注2）}を強調するのに対し、後者が「発達」を強調する点において異なる。

規範意識の「経時効果」を強調する立場によると、経年に伴い青年の規範意識がおおむね低下していないことを示す知見と経年に伴い規範意識が低下していることを示す知見の2種類がある。前者に関して、高橋（2003）は中学生・高校生・青年を対象として、3時点（調査年度：1992年、1997年、2001年）において測定された規範意識（山口県）を再分析している。その結果、ほとんどの調査項目において経年による規範意識の低下が見られず、調査期間10年の間に規範への逸脱に対して、否定的な評価が行われる傾向（規範意識の上昇）が見られることを示した^{（注3）}。また、清永・榎本・飛世（2004）は、3種類の社会規範（反社会的行為、反社会的慣行行為、反学校・反家庭内の規範行為）について、全国から抽出した11校の中学2年生を対象とし、二時点（1987年、2001年）において、質問紙調査を実施した。その結果、1987年よりも2001年において、法や社会で定められた規範に対する反社会者は少ないが、学校や家庭を中心とした規範に対しては反社会的な傾向を強めていることが明らかとされた。これらの結果より、社会規範に関して経年による低下はおおむね見られないことが示唆される。経年により規範意識が低下していると述べる立場によると、青年の規範意識が低下するのは規範の存在する社会構造との関連にあると説明される。具体的には、1950年代以降、社会システムは伝統的な居住状況や集落構造が新しい都市型の構造に取って代わられたという。前者が家族を超えて広がる共同体に強く志向した居住形態や集落形態を特色とするのに対し、後者は社会構造が雑多で近隣・知人関係がかなり緩やかであることをその特色としている（Beck, 1986）。日本においても同様であるとされ、人の居住が流動的になり、必ずしも地域に根

ざした人間関係の上に生活は構築されてはいないことにより、規範意識が低下したと捉えられている（井上, 1977；菅原, 2005）。しかしながら、規範意識が経年により変容しているのか否かについて示した実証的証拠はほとんどない。

一方、「発達」の観点から検討する立場によると、廣岡・横矢（2006）は小学生・中学生・高校生を対象とし、規範意識に関する質問紙調査を実施している。その結果、学年が上がるにつれて規範意識が低下していることが明らかとされた。松尾・新井（1999）は小学生・中学生・高校生を対象として、道徳的な事柄、慣習的な事柄、個人的な事柄を提示し、自己決定してよいかどうかを調べた。その結果、特に慣習的な事柄および個人的な事柄において加齢に伴い自己決定してよいと考える判断が増加することが明らかとなった。また、松尾・永田・藤澤（2012）は日本全国から人口比と男女比を統制した20代から50代を対象として、規範意識について訪問調査を行った。その結果、ほかの世代と比較して青年（20代）の規範意識が必ずしも一番低いわけではないこと、つまり、青年期以降においても加齢に伴い規範意識が一方的に低下をしているわけではないことが明らかとされた。高橋（2003）は規範意識について経年変化と発達の両方の観点から調査を行った。具体的には調査年度（1992年、1997年、2001年）×対象学年（小学校5年生、中学校2年生、高校2年生、青年）の比較を行った。その結果、経年よりも発達（10年間）において規範意識が大きく低下していることが明らかとされた。

以上の先行研究より、加齢に伴い青年に向かうほど規範意識が低くなることが示唆されるが、経年により規範意識が低下しているのかについては明らかにされてはいない。また、経年に伴う青年の規範意識については、低下をしている（経時効果の一部）と考える立場と規範意識は低下していない（経時効果の一部と発達）と考える立場の2つがあるといえる。しかし、本研究で取り上げる青年の規範意識の低下については、これまで「経時効果」と「発達」が混合して論じられている可能性が指摘できる。また、青年期を対象として規範

意識にアプローチする際、先行研究では解決されていないいくつかの問題が残されることが考えられる。第一に、従来のように、ある規範を遵守するか否かという量的側面のみから規範意識を測定した場合、一見、規範意識が低下したかのような反応（相対主義）を青年期の規範意識として誤って測定してしまう可能性が指摘できる（内藤，1987）^(注4)。そこで、青年の規範意識について検討する場合には、規範を遵守するか否かあるいは支持するか否かといった観点（規範意識の量的側面）だけではなく、どのように規範を認知しているのか（規範意識の質的側面；理由付け）についても焦点を当てる必要があるといえる。これにより調査協力者が単に規範を否定しているのか（規範意識が低い）あるいは状況や文脈を考慮した上での判断であるのか（規範意識が低いわけではない）を区別して規範意識を測定することができ、経時効果について検討することが可能になると考えられる。第二に、青年の規範意識について経時効果を実証的に検討した先行研究がほとんどない（規範意識を量的側面から検討した経時効果の一部の立場を除く）ことが指摘でき、統計的に明らかにされることには意義があるといえる。また、規範意識の経時効果を規範意識の質的側面から検討した研究は藤澤（2013）を除いてほとんどなく、知見の蓄積という観点からも意義があると考えられる。第三に、仮に青年の規範意識が経年により低下しているとしても、あらゆる規範の規範意識が低下しているのかどうかについては検討の余地が残されることが考えられる。Turiel（1998）によると社会的知識の認識には道徳領域（普遍的な事柄）、慣習領域（文脈依存の事柄）、個人領域（個人の判断に任される事柄）の3領域があり^(注5)、慣習領域や個人領域は文化や社会集団により形成されるものであると述べられている。また、その認識にはある程度の変動が認められるという（Nucci，1981）。併せて、このような個人が持つ社会的知識の領域認識が人の社会的行動の産出過程に影響することがモデル化されており（Arsenio & Lemerise，2004）、社会的行動に関係する社会的知識の領域認識の仕方およびその経時効果を明ら

かにすることに意義があると考えられる。

そこで、本研究では以上の問題意識に基づき、大学生を対象とし、2003年、2009年、2011年（社会的危機）に規範意識を量的側面、質的側面の両方から測定し、その経時効果について検討することを目的とする。

方法

調査協力者

関東・東海エリアの公立大学・私立大学において教職科目を履修する2年生405名であった。2003年度は139名（男性97名、女性42名、 $M=20.0$ 歳、 $SD=4.5$ ）、2009年度は148名（男性105名、女性43名、 $M=19.1$ 歳、 $SD=.50$ ）、2011年度^(注6)は120名（男性53名、女性67名、 $M=20.7$ 歳、 $SD=.74$ ）の協力が得られた。

調査内容

調査項目として使用されたのは藤澤（2005，2013）と同様の「人の物を盗んではいけない」、「ゴミのポイ捨て禁止」、「嘘をついてはいけない」、「悪口を言ってはいけない」、「公共の場では静かにする」、「授業中の飲食禁止」、「公共の場でメイクをしてはいけない」、「未成年の飲酒禁止」の8項目であった。調査協力者がこれらの調査項目をどのように認識しているかを調べるために8項目の各々について、領域特殊理論に従い、規則随伴性判断と理由付けが求められた（Nucci，2001）。

規則随伴性判断 項目ごとに「〇〇というルール（当該ルール）がなくても〇〇（前述の当該ルール）に違反することは悪いか悪くないか」について6件法で回答するように求められた（全く悪くない、悪くない、どちらかというとも悪くない、どちらかというとも悪い、悪い、非常に悪い）。

理由付け 規則随伴性判断をする際に「全く悪くない」から「非常に悪い」までの判断をした理由を自由記述で回答するように求められた。

調査手続き

2003年、2009年、2011年に同内容の質問紙調査が授業中に集団実施された。

得点化

規則随伴性判断 「全く悪くない」に1点、「悪

くない」に2点,「どちらかというと悪くない」に3点,「どちらかという悪い」に4点,「悪い」に5点,「非常に悪い」に6点が割り当てられた。得点が高いほど,当該行為違背を悪いと判断して

いる(=規範意識が高い)。

コード化

理由づけ Table1に従い,「道德」,「慣習」,「個人道德」,「状況的慣習」,「個人」に割り当て

Table 1：理由付けの定義と分類

領域	理由付けの定義	分類の反応例
道德	絶対にしてはいけない 他者の福祉・権利の侵害	・絶対にしてはいけないことだ ・他者の権利を侵害するから
慣習	社会システムの維持	・マナー違反だから ・他人に迷惑だから
個人道德	道德と自己判断の混在	・よくないことであるが,個人の判断に任される
状況的慣習	慣習と自己判断の混在	・迷惑がかからない程度であれば,個人の自由である
個人	個人の問題 許容範囲	・個人の自由 ・制限されてはいけない

注) 藤澤 (2005, 2013) より引用。

られた。独立した評定者(そのうち1名は筆者)の一致率は87.0%であった。一致しない理由づけについては話し合いの上,いずれかの領域に割り当てられた。項目別の反応例はTable2に示した。また,以上の領域分類を行った理由づけは,統計分析を行うために,「道德・個人道德」(善悪の規準がある,あるいは善悪の規準と自己裁量の考慮),「慣習・状況的慣習」(文脈依存,あるいは文脈と自己裁量の考慮),「個人」(個人の自由)の3つに分類された。

結果

時間の経過に伴う規範意識の変化：量的側面

規範意識の量的側面(規則随伴性判断)について,調査年度別の統計量をTable3に示した。続いて,規範意識の三時点の量的変化を検討するために,項目別に,調査年度(2003年,2009年,2011年)を独立変数,規則随伴性判断得点を従属変数として一要因の分散分析を行った。その結果,「悪口」,「メーク」,「飲酒」の主効果が有意であった(悪口： $F(2, 386) = 4.86, p < .01$, メーク： $F(2, 384) = 3.85, p < .05$, 飲酒： $F(2, 384) = 3.51, p < .05$)。多重比較(Bonferroni法)の結果,「悪口」,「メーク」は2003年よりも2009年において有意に高く,「飲酒」は2003年よりも2011年に

おいて有意に高いことが示された。

時間の経過に伴う規範意識の変化：質的側面

先の問題の分析に先立ち,領域特殊理論に基づき5領域に分類した8項目の各々の理由付けについて,項目別の人数と割合をFigure1, Figure2, Figure3に示した。いずれの調査年度においても各項目は人により「道德」,「慣習」,「個人道德」,「状況的慣習」,「個人」と異なる領域として認識されていた。以上は,いずれの調査年度においても規範の認識における多様性が調査協力者において見られることを示唆する。

各調査項目がどのような領域として認識されているかについて調査年度別に検討するため,項目別に調査年度(2003, 2009, 2011)×領域(道德・個人道德, 慣習・状況的慣習, 個人)の χ^2 検定を行った。その結果をTable4に示した。「ゴミ」,「静か」,「悪口」,「嘘」,「メーク」,「飲酒」において有意であった(ゴミ： $\chi^2(4) = 102.84, p < .001$, 静か： $\chi^2(4) = 89.07, p < .001$, 悪口： $\chi^2(4) = 46.15, p < .001$, 嘘： $\chi^2(4) = 14.36, p < .01$, メーク： $\chi^2(4) = 12.80, p < .05$, 飲酒： $\chi^2(4) = 77.13, p < .001$)。

続いて,有意差のあった6項目について,残差分析を行った。その結果,「ゴミ」に関して,2009年において「道德・個人道德」と判断する人

Table 2：項目別の領域別反応例

	領域	反応例
盗み	道徳	・他者の権利を侵害するから。
	慣習	・加害者が悪いが、本人も悪い。
	個人道徳	・経営が成り立たない。
	状況的慣習	—
	個人	・必要なものがあれば盗ればいい。
ゴミ	道徳	・許されない。
	慣習	・コミュニティがうまくいかなくなる。
	個人道徳	—
	状況的慣習	・多少ならかまわない。
	個人	・自分にとってはただのゴミだから。
静か	道徳	・他者の害になることはしてはいけない。
	慣習	・人としてのマナーにあてはまる。
	個人道徳	—
	状況的慣習	・迷惑だと感じなければいい。
	個人	・個人の自由。
悪口	道徳	・人を傷つけてしまうから。
	慣習	・対人関係やコミュニティを危うくするから。
	個人道徳	・いじめになったらよくないが、悪いところを教えてあげるならよい。
	状況的慣習	—
	個人	・悪口はよくあることだ。
嘘	道徳	・人を傷つけてしまうから。
	慣習	・不快に思う人がいるから。
	個人道徳	・騙す嘘は許されないが、幸せにする嘘もある。
	状況的慣習	・不快に思う人もいるかもしれないが、本人に任される。
	個人	・本人の自由。
マーク	道徳	・気分の悪い思いをしたことがあるから絶対によくない。
	慣習	・見ていて見苦しいから。
	個人道徳	—
	状況的慣習	・好ましくないが本人の自由。
	個人	・マークしている姿を不快と感じない。
飲酒	道徳	・人を傷つけてしまうから。
	慣習	・犯罪の起こる可能性が高くなる。
	個人道徳	—
	状況的慣習	・ある程度の年齢であれば個人の問題。
	個人	・本人の判断に任される。
飲食	道徳	・モラルの問題。
	慣習	・公共の場だから。
	個人道徳	—
	状況的慣習	・授業妨害にならないなら構わない。
	個人	・自分の勝手。

Table 3：2003-2011の規範意識の経年変化

	2003		2009		2011		F 値 有意差	多重比較 (Bonferroni)
	M	SD	M	SD	M	SD		
盗み	5.1	1.2	5.1	1.3	5.2	1.1	0.13	
ゴミ	4.8	1.2	4.9	1.3	4.8	1.1	0.12	
静か	4.3	1.4	4.2	1.4	4.2	1.3	0.17	
悪口	3.3	1.5	3.8	1.5	3.6	1.4	4.86**	2003<2009
嘘	3.1	1.3	3.1	1.4	3.1	1.4	0.13	
メイク	2.8	1.4	3.3	1.6	3.1	1.5	3.85*	2003<2009
飲酒	3.0	1.5	3.1	1.6	3.5	1.6	3.51*	2003<2011
飲食	3.8	1.4	3.5	1.6	3.5	1.4	2.16	

$p<.01^{**}$, $p<.05^{*}$

が有意に少なく、「慣習・状況的慣習」と判断する人が有意に多かった。2011年において「道徳・個人道徳」と判断する人が有意に多く、「慣習・状況的慣習」と判断する人が有意に少なかった。「静か」に関して、2003年、2009年の両方において「道徳・個人道徳」と判断する人が有意に少なく、「慣習・状況的慣習」と判断する人が有意に多かった。2011年に「道徳・個人道徳」と判断する人が有意に多く、「慣習・状況的慣習」と判断する人が有意に少なかった。「悪口」に関して、

2003年に「慣習・状況的慣習」と判断する人が有意に少なかった。2009年において「慣習・状況的慣習」と判断する人が有意に多く、「個人」と判断する人が有意に少なかった。2011年において「個人」と判断する人が有意に多かった。「嘘」に関して、2003年に「慣習・状況的慣習」と判断する人が有意に少なく、2011年において「道徳・個人道徳」と判断する人が有意に少なかった。「メイク」に関して、2003年に「道徳・個人道徳」と判断する人が有意に少なく、2011年において「道徳・個人道徳」と判断する人が有意に多かった。「飲酒」に関して、2003年、2009年の両方において「道徳・個人道徳」と判断する人が有意に少なかった。2011年において「道徳・個人道徳」と判断する人が有意に多く、「個人」と判断する人が有意に少なかった。

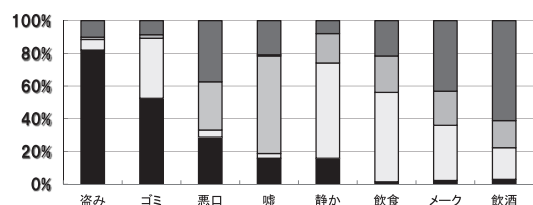


Figure 1：2003年の各項目の領域別の理由づけの割合

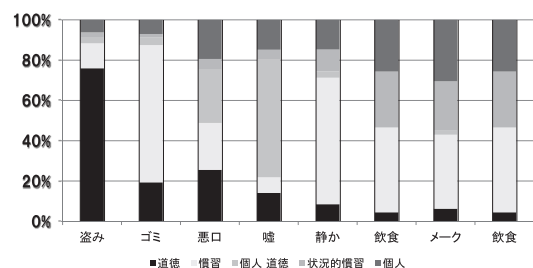


Figure 2：2009年の各項目の領域別の理由づけの割合

考察

本研究では、「青年の規範意識の低下」の問題

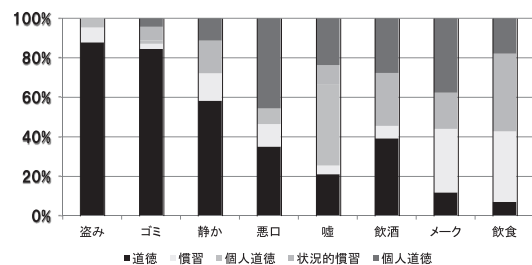


Figure 3：2011年の各項目の領域別の理由づけの割合

Table 4：経年別の理由づけに関する残差分析の結果

		道徳・個人道徳		慣習・状況的慣習		個人	
		<i>n</i>	残差	<i>n</i>	残差	<i>n</i>	残差
盗み	2003	116		9		13	13
	2009	102		19		8	8
	2011	99		8		6	6
ゴミ	2003	73	-0.03	53	-0.54	12	1.11
	2009	30	-8.31**	90	8.41**	9	0.1
	2011	100	8.58**	11	-8.08**	5	-1.27
静か	2003	21	-3.89**	106	4.55**	11	-1.53
	2009	15	-4.82**	95	3.41**	19	1.53
	2011	67	9.05**	35	-8.27**	13	0.02
悪口	2003	80	1.92	5	-4.53**	53	1.33
	2009	67	0.14	37	5.66**	25	-4.34**
	2011	49	-2.16*	13	-1.1	52	3.09**
嘘	2003	104	1.56	4	-3.31**	30	0.64
	2009	93	0.65	16	1.44	19	-1.79
	2011	71	-2.31*	16	1.99*	27	1.18
メーク	2003	3	-2.87**	75	-0.33	60	1.88
	2009	11	0.75	78	1.53	39	-1.98
	2011	13	2.27*	55	-1.25	41	0.07
飲酒	2003	4	-5.16**	49	-0.86	85	4.6**
	2009	11	-2.69**	59	2.21	58	-0.2
	2011	44	8.23**	37	-1.38	31	-4.65**
飲食	2003	3		102		33	33
	2009	6		93		29	29
	2011	8		84		20	20

 $p < .01^{**}$, $p < .05^{*}$

について、青年を対象とし2003年、2009年、2011年において、規範意識を量的側面、質的側面の両方から測定し、その経時効果について検討した。これらの結果について、規範意識の経時効果の観点から考察する。

青年の規範意識の経時効果を検討するにあたり、同じ調査項目について量的側面、質的側面の両方から規範意識を検討した。その結果、規範意識の量的側面に関して、2003年と比較して2009年において「悪口」、「メーク」を支持する得点が高くなりその後変化していないこと、2003年と比較して2011年において「飲酒」を支持する得点が高いことが示された。また、残りの5項目に関しては、

経年による変化は見られなかった。青年を対象とした規範意識を量的側面から検討した先行研究においても、項目によっては規範意識の上昇するもの（割合の上昇）のあることが示唆されており（清永ほか、2004；高橋、2003）、本研究の結果はそれを部分的にも統計的に示したといえる。一方、規範意識を量的側面から検討した結果は規範意識が低下してきているという立場（例えば、Beck, 1986）を支持しなかった。しかしながら、以上の結果は規範意識について量的側面のみから捉えたものであり、規範の認識の質的側面において規範意識の低下が見られるのかどうか、また、量的側面のみからでは個人にどのように認識され

る規範が上昇するののかについては明らかとされてはいない。よって、規範認識の質的側面（どのように規範を認識しているか）により、経年による規範意識の変容があるのかどうかについて検討する余地が残されたと考えられた。

そこで、同様の8項目について質的側面から規範意識の経時効果を検討した。その結果、「メイク」、「飲酒」において経年に伴い「個人」と認識する人が少なかった。「悪口」は2009年に「個人」と認識する人が少なかった。以上の結果より、規範意識を質的側面から見ると、各調査項目を個人の自由で判断している事柄だと認識する人が経年に伴い増加しているわけではないことが示唆される（2011年の「悪口」を除く）。「ゴミ」、「静か」、「嘘」、「飲酒」に関して経年に伴い「道徳・個人道徳」あるいは「慣習・状況的慣習」と認識する人が多かった。また、「ゴミ」、「静か」、「嘘」、「メイク」、「飲酒」に関しては調査期間の9年間では「道徳・個人道徳」あるいは「慣習・状況的慣習」と認識される領域が異なっていた。以上2つの結果より、規範意識を質的側面からみると、規範意識は経年により一方的に低下をしているのではなく質的に変容している可能性のあることが示唆される。例えば、少し前までは「嘘」は道徳的な事柄だと認識されていたかもしれないが、振り込み詐欺などが蔓延し国を挙げて取り締まるようになってきている現在では、法律違反（慣習）と認識する人が多いのかもしれない。また、「ゴミ」、「静か」、「メイク」、「飲酒」はかつて慣習と認識されていたかもしれないが、経年に伴い道徳と認識されているのかもしれない。その可能性の一つとして近年の公共広告の増加が挙げられる。「ゴミ」、「静か」、「メイク」、「飲酒」のいずれも迷惑行為として公共広告に示されており、その広告量は年々増えてきている。このことがそれらの行為を行うことを個人の自由だと判断させないように働きかけていると解釈することも可能である。高橋（2003）、清永ほか（2004）は規範の種類によっては経年に伴う規範意識の上昇が見られることを示唆しているが、本研究の結果は、以上を統計的に、そして規範の認識別にも示したといえよう。

ただし、「悪口」のみ2011年において個人の自由だと判断する人が多かった（2009年では有意に少なかった）。以上の結果は、2008年の金融危機以降、2011年（社会的危機（震災））に向かう程加速する、政権の変化、超円高、震災、ユーロの不安定化、雇用の悪化など複合的要因による社会の閉塞感に対するやり場のない思いが反映されているのかもしれない。

今後の課題

規範意識を量的側面から見たときには経年に伴い規範意識が低下してはいなかったが、規範意識を質的側面から見ると、いずれの調査年度においてもあらゆる規範において個人の自由であると判断している人が一定の割合で存在していた。この結果は、常に規範意識の低い人がいることや規範意識が低下していく可能性のあることを示唆すると考えられる。また、本研究は規範意識の経時効果を検討したといっても9年間という限定的なものである。よって、今後も規範意識の経年変化を検討する必要があることが課題として挙げられる。規範意識が高すぎることは個人の自由が制限されたり、自律が阻まれたりすると考えられる一方、規範意識が低すぎることも社会生活を行う上で差し障りがないとはいえない。また、規範を含めた領域認識が社会的行動にインパクトを持つことから（Arsenio & Lemerise, 2004）、規範意識が低い、あるいは規範意識が低下する傾向にある人に焦点を当てた教育的取り組みについても検討していく必要があるといえる。

脚注

（注1）規範意識とは「ある対象について価値判断を下す際に、その前提となっている価値を価値として認める意識（大辞泉）」と定義する。

（注2）本研究では規範意識の経時効果とは、同一項目に関して過去の複数時点における変化とする。

（注3）過去10年間の間に、規範意識が低下（逸脱を悪いとしない割合が10%以上低下）した項目が1つであるのに対し、規範意識が上昇（逸脱を悪いとする割合が10%以上上昇）したのは9項目であった。

（注4）例えば、「嘘をついてはいけない」という事柄

に対し、小学生は無条件に遵守すると反応するであろうが、学年が上がるにつれて例外的な事例に気が付き（例：がんを告知しないことは嘘をついたことになるのかなど）、一概に遵守しないと判断することがある。このような理由から遵守しないと判断される場合は規範意識が低下したとは判断されない。

（注5）Turielは「道徳」、「慣習」、「個人」の3領域のほかには複数の領域にまたがる判断を混合領域として挙げており、本研究では、「個人道徳（道徳と個人の混在した判断）」および「状況的慣習（慣習と個人の混在した判断）」を取り上げる。

（注6）社会的危機の生じた年には絆が強まると言われることから、規範意識は低下しにくいと考えられ、調査対象年度として加えた。

引用文献

- Arsenio, W. F., & Lemerise, E. A. (2004). Aggression and moral development: integrating social information processing and moral domain models. *Child Development*, 75, 987-1002.
- Beck, U. (1986). *Die Risikogesellschaft. Auf dem Weg in eine andere Moderne*. Frankfurt am Main: suhrkamp Verlag. (Beck, U. 東廉・伊藤美登里 (訳). 危険社会：新しい近代への道. 東京：法政大学出版局)
- 藤澤文 (2005). 大学生の社会的ルール決定場面における討論手続き. *パーソナリティ研究*, 15, 17-29.
- 藤澤文 (2009). 青少年の規範意識の変容：心理的要因・社会的要因に焦点を当てた教育的取り組みの提案. *道徳教育方法研究*, 15, 32-42.
- 藤澤文 (2013). 青年の規範の理解における討議の役割. 京都：ナカニシヤ出版.
- 廣岡秀一・横谷祥代 (2006). 小学生・中学生・高校生の規範意識と関連する要因の分析. *三重大学教育学部研究紀要*, 57, 111-120.
- 井上忠司 (1977). 「世間体」の構造：社会心理史への試み (NHK ブックス). 東京：日本放送出版協会.
- 清永賢二・榎本和佳・飛世聡子 (2004). 社会規範に対する少年の態度と意識に関する研究—1987年調査と2001年調査の比較分析. *人間研究*, 40, 23-36.
- 松尾直博・新井邦二郎 (1999). 子どもの自己決定と領域別社会的ルールの発達. *Tsukuba Psychological Research*, 21, 107-113.
- 松尾直博・永田繁雄・藤澤文 (2012). 成人の道徳性と子どもの頃の体験に関する調査報告書. 東京：東京学芸大学.
- 内閣府大臣官房政府広報室編 (2005). 「月刊世論調査少年非行等（附帯：障害者の社会参加）」, 37, 4.
- 内藤俊史 (1987). 道徳性と相互行為の発達—コールバーグとハーバーマス— 藤原保信・三島憲一・木前利秋編著 *ハーバーマスと現代* (pp.182-195). 東京：新評論.
- 二宮克美 (1991). 規範意識の発達および非行・問題行動と道徳性との関係. *新・児童心理学講座第9巻* (pp.205-242).
- Nucci, L. P. (1981). Conceptions of personal issues: a domain distinct from moral or social concepts. *Child Development*, 52, 114-121.
- Nucci, L. P. (2001). *Education in the moral domain*. UK: Cambridge University Press.
- 菅原健介 (2005). 羞恥心はどこへ消えた？ 東京：光文社.
- 高橋征仁 (2003). コールバーグ理論と道徳意識研究—規範意識における相対化と逸脱行動. *社会学研究*, 74, 27-58.
- Turiel, E. (1998). The development of morality. In N. Eisenberg (Ed.), W. Damon. (Series Ed.), *Handbook of child psychology. 5th ed. Vol.3. Social, emotional, and personality development* (pp.863-932). New York: Wiley.
- 友枝繁雄・鈴木護編著 (2003). 現代高校生の規範意識：規範の崩壊か、それとも変容か. 福岡：九州大学出版会.
- 山岸明子 (2002). 現代青年の規範意識の希薄性の発達の意味. *順天堂大学医療短期大学紀要*, 13, 49-58.
- 山口県 (2002). 青少年の規範意識に関する調査：結果報告書.

要旨

近年、青年の規範意識が低下したといわれることがある。本研究では青年405名を対象として規範意識の量的側面、質的側面から三時点（2003年、2009年、2011年（社会的危機））において経年変化を検討した。その結果、規範意識は量的側面（6件法）においては経年

に伴い低下をしておらず、規範によっては経年に伴い上昇していることが示された。また、規範意識の質的側面（理由付け）では経年に伴いおおむねの規範について個人の自由だと判断する人が増加しているということではなく、「道徳」あるいは「慣習」と理解している人が多かった。これらの結果について、社会経済状況を踏まえ考察を行った。

（2013年10月1日受稿）